

(井上講師 講演録)

皆さんこんにちは。

最後、あと 30 分ちよつとですので、おつきあいいただきたいなと思います。

今ご紹介いただきました。私は、碧南市の方ですね、キャラバンメイト連絡会。皆さんが受けていただいた認知症サポーター養成講座の講師役のキャラバンメイトの連絡会というのを立ち上げて、碧南市のキャラバンメイト連絡会として活動しているとともに、あと愛知県の認知症介護指導者として専門職向けに認知症のお話をさせていただいております。実は明日も名古屋で、介護福祉士会が主催する認知症の実践者研修で、認知症ケアにおける倫理とか権利擁護の部分で、ちよつとお話をさせてもらったりするのですが、あとはですね、私の祖父が認知症、脳梗塞の後の認知症、なので先生のお話だと 4 大認知症の中で血管性の認知症ですね。で、10 年寝たきりで、そのうちの 5 年間を在宅で親が診ていたということもあって、そこから介護の分野に入ってきてまして、介護の専門学校を経て、平成 13 年から認知症の高齢者と関わる介護の仕事をしています。その当時ですね。介護、どんなイメージがありますかね。今の認知症のケアとかなり違ったのですけど。

まず、専門学校で実習に行ってお勉強されたことは、車いすから立ち上がらないように、どうやって本人がほどこけないように紐で縛りつけるか、でした。

お風呂は、どれだけ短時間の間に、効率よく、何人を入れられるか、それが介護の専門性という形の中で、介護が行われていました。

やっぱり、それでは駄目じゃないかっていうところで、自分もいろいろ勉強したりして、あとは、その当時は認知症になったら終わり、高齢になったら終わり、そんなイメージがあったので、10 年ぐらいつと認知症の方と接しながら、グループホームの介護職とか管理者とか、あとは老健の方で、介護係長とかいろいろやらせてもらって、平成 28 年に独立して会社を立ち上げて、平成 29 年 4 月から碧南の方でグループホームっていうのを立ち上げました。

今ご紹介いただきましたけども、そういった想いもあったので、認知症になっても、高齢になっても、夢や希望を持って人生の最後まで、花を咲かせ続けられるように、ともに歩むっていう、うちの理念ではともに歩むことが大事。一方的に介護するのではなくて、ともに歩むっていうことを大事にして、事業を行っています。それはこのサポーター養成講座、ステップアップの中でも同じことがいえるのかなと思うのですが、認知症サポーターって一方的に何かをしてあげるのではなくて、やっぱり本人とともに考えて、ともに困ったことをサポートするっていうところがサポーターとして求められる部分じゃないかなと思っています。

【スライド p 1】

それではスライドの方をお願いします。

今日事前にお聞きした中で、認知症サポーター養成講座を受けた方がほとんどっていうふ

うにお聞きしています。

認知症サポーター養成講座、ちょっと思い浮かべていただきたいと思うのですが、各市町村によって少し教材は違っているのかなと思うのですが、標準テキストを使われて、受講された方の中にはこういうことが書いてあったと思う。

認知症サポーター養成講座は、認知症サポーターは何か特別なことをやる人ではありませんっていうふうに書かれています。

これが意外と誤解を生んでいて、じゃ何もやらなくていいのだっていうようなところがあるかと思います。

平成 17 年に認知症サポーター養成講座、あの認知症を支援する地域をつくる 10 ヶ年ってことで始まっていて、その時は全国で 100 万人キャラバンってことで始まっています。

最初のごあいさつの中にもあったように、今全国で 1,100 万人。国は 1,200 万人まで養成しようとしています。全国で 1,100 万人います。

今日もオレンジリング、小菅さんが言われていました。オレンジリング、つけている人いますか。全国で 1,100 万人いますよ、皆さん、地域の中でつけている人見たことある人いますか。ちょっとあがりますよね。ここから抜いてきます。

介護の専門職、行政職員を抜いて付けている人を見たことありますか。これ多い方だと思います。

行政職員は結構つけています。名札につけていたりとか。それから介護の専門職も結構つけていたりします。それを除いたら結構、地域の中で見ることもほとんどなくなります。

これがどういうことかっていうと、じゃあ、家族本人が、その 1,100 万人増えてきたっていうことをまずは認識できない・自覚できないのですよね。

それだけ認知症について理解はある人がどんどん増えているのだってことが、まず当事者、ご家族が知る機会がない。まさに認知症サポーターって何？って言われる当事者・ご家族もたくさんいます。なので、家族や当事者にとって、自分たちのことをきちんと理解してサポートしてくれる人達がどんどん、どんどん増えているんだといったことがやっぱりわかって安心できるようにぜひ、このオレンジリング、僕は手に新旧二つ、ちょっと厚いやつが昔のやつで、今細いリングのやつで。こういった講演に立つと、スーツ着ちゃうと袖は見えなくなっちゃうので、スーツのところはロバのピンバッチをつけたりということで、こういった形でいつも啓発活動をしたりとか。カバンもさっき、徘徊ってないですよっていったところで、徘徊撲滅のやつを、ちょっと今日、もう 1 個、認知って呼ばないでっていうバッジもあるんですけど、昔痴呆って言われたのが、認知症って言葉に変わって。でもそれが、最近では認知症のことを認知、認知って。専門職も認知があるとかって言ったりするんですけど、正しい言葉をきちんと伝えるってことで、そういったものも、身につけて啓発活動したりしています。

この認知症サポーター養成講座、何か特別なことをする人でありませんっていうふうに謳っているのですが、でも何もやらないいいですよとは伝えてないんですよ。

じゃ、何かやれることもあるんじゃないかっていったところで、碧南市でも、認知症サポーター養成講座を受けてもらった人、その後にフォローアップ講座というものを碧南市では開

催しました。

2年ぐらい前からですかね。ステップアップ講座っていうのができて名前とか変わっていきましても、碧南市ではフォローアップ講座っていうのをやっていました。

その中で、サポーター養成講座を受けたりとか、いろんなお話をしている中で、何か自分たちでできることってないのだろうかといったところを、みんなで話し合ってもらいました。

【スライド p 2】

今日は時間がないのでちょっとあれなんですけども、グループワークみたいな形で、自分ができること、あとは認知症の方とか家族が困っているから、こういうことがあったらいいよねっていったのを、どんどん、どんどん自分で思い浮かぶだけ付箋にバーツと書いてもらいました。それを、この表の中で、グループで貼っていってもらいました。

市民レベルでできそうなことと、行政がちょっと関わらないと難しいよねっていうことと、それからすぐにできそうなことと、時間をかけないと難しそうだよっていうことを、グループの中で貼っていってもらって、領域1ですね、市民レベルでできて、すぐできそうなこと。領域1の中で、人が集まればどういうことができるのかなっていったことを中心に、活動への展開っていうところに移しました。

【スライド p 3】

こうやって整理していく中で、こういうことやってみたいとか、これなら自分ひとりでは無理だけど、仲間と一緒にだったらできるんじゃないかなとか、あとは、嫌々とかじゃなくって、自分も楽しみながらなんかできそうだなっていったこと、そういった前向きな意見がどんどん出てきて、実は14名のそういったグループワークを行って、いろいろ発表してもらって、フォローアップ講座を受けてもらった後に、14名の仲間がグループを作って、今国が進めているチームオレンジですね、チームオレンジに似たようなものなんですけれども、14名の仲間が集まって認知症カフェの立ち上げっていうところに繋がっています。

【スライド p 4】

認知症サポーター養成講座を受けて、フォローアップ講座を受けて、14名の仲間で作ったものが「ケアラズカフェれんげ草」っていうものなんですけども、その活動がですね。昨年全国キャラバンメイト連絡会議の総会の方で表彰されたので、その活動とか紹介できればなと思っています。

【スライド p 5】

これが実際にですね、14名写っていないんですけども、運営してる方です。

もともとこの方も、介護に興味があって、サポーター養成講座を受けたわけじゃなくって実は防災ボランティアとか、そういった方が、災害時に認知症の方が避難してきたら、自分たちが知識がなくて、支援ができるのかどうかっていったところから、まずは認知症について学んでみようっていうことで、サポーター養成講座を受けていただきました。

そうしたら、災害だけじゃなくって、認知症のことに関しても、地域の中でいろいろ課題があるのだよね。そこに自分たちも関わられたらなっていうことで、実はこういったカフェの運営に関わってもらって、全然認知症とか、介護っていうところに、あんまり縁がなかった人たちが中心となって、もちろん介護をやっていた方もいるんですけど、やっています。

【スライド p 6】

この認知症カフェれんげ草なんですけど、れんげ草の花言葉を知っていますかっていうことで、れんげ草の花言葉は、あなたと一緒に苦痛が和らぐっていう、意味です。

この言葉は、ボランティアさんがいろいろ花言葉を調べて、名前を付けたものです。

これは専門職とか行政とかが、こういったのをやっってくださいって言ったわけじゃなくて、お手元の資料で、写真が写っていると思うんですけども、ちょっとなんか、かつらみたいなのをかぶって真ん中に写っているおじ様が、花言葉を見つけて作ってくださったものなんですけども。そういった意味で、「ケアラズカフェれんげ草」っていうのは、そんなような花言葉のように、ほっとできるカフェっていうのを目指して、活動の方が進んでおります。

認知症の方とか、それを介護されるご家族の方を中心に、認知症サポーターであるボランティアがお話し相手になるってことで、通常の運営に行政とか専門職は一切関わってなくて、本当にサポーター養成講座を受けていただいたボランティアが中心になっています。

先ほど小菅さんの話でもあったように、ほっとできるカフェっていうことで、認知症の方が来たら、何に困っていますかってどんどん尋問したりしないとか、ご家族の方が来ても、そういう時はね、こういう介護をしたらいいんだよ、なんていうことを言うと、あそこに行くと、なんか自分が責められているような感じになったりとか、行きづらいカフェにならないように、そういったご本人とご家族が来やすいようなほっとできる、あそこにいると気が休まるよなといったカフェを目指して、運営の方しています。

【スライド p 7】

これがボランティア中心で運営をしまして、このボランティアさん、全員碧南市キャラバンメイト連絡会のカフェ部会っていうところに所属をしてもらって、それはなんでこうするかっていうと、予算とか、お金がやっぱり掛かることとかをどうやってやるかといったところで。前は個人個人の活動だったものを、実はキャラバンメイト連絡会っていうのを立ち上げて、市から委託事業をとって、そしてキャラバンメイト連絡会の中のカフェ部会っていう位置付けにすることによって、そういったお金の動きがしやすいような仕組みを作って活動しております。

【スライド p 8】

これは認知症サポーターから始まったということで、全部一般の市民の方が運営をされています。

れんげ草ボランティアは、実際に認知症サポーター養成講座を受けて、認知症の方の理解者っていうところから、実際の活動に繋がる支援者っていう活動の場のところに移る形です

ね、このリングをとって終わりじゃなくって、それから何ができるのだろうかという次の展開に移していただく。それは強制じゃなくって、そういうことをやってもいいよっていう方が集まって支援者として動いているっていう団体になります。

【スライド p 9】

実際フォローアップ講座を受けていただいて、カフェ部会の結成があって、何度も部会を開催して、いろんな課題が出てきました。

【スライド p 10】

まず場所をどうするか。

カフェを運営するために場所をどうするのかとか、諸経費をどう賄うとか、金銭管理をどうするのかとか、これ結構多かったですね。実際に活動するのはいいけど、お金の管理はやっぱりしたくないっていうところは、自分たちはボランティアだから、そういったお金の管理までしたくないっていう。

あと、毎回毎回、場所を借りられるところはあるのだけど、その都度、カフェの備品を全部誰かが一時的に保管して毎回持ってくるのかっていうところとか、そういったことをどうするのか、あとはどうやって周知すればいいのか、といういろんな課題が出てきました。

【スライド p 11】

そういったのをずっと部会の中で、半年ぐらいずっと話し合いを、実はしてきました。ボランティアだけだと運営が難しいっていうことで、そこで共催を申し込んだのが、「大浜まちかどサロン」っていうところなんですけども、行政が参画する市内のサロン、建物があるんですけども、そこの共有スペースを使って、認知症カフェをやろうっていうことで始まっています。

ここはもともと碧南市のスペースで、地域の高齢者の交流の場所っていうことで市内に2ヶ所あるんですけども、そのうちの1ヶ所を使ってやるっていうことで、これは街かどサロン、建物側も、高齢者が気軽に集える場所づくりっていうのを検討していたので、双方のニーズが一致して、ぜひ一緒にやりましょうということで、行政とボランティアとの協働で運営しているカフェっていう形になります。

【スライド p 13】

課題が解決したので、実際に運営の方が始まるっていう形です。

行政が関わっているんで、この建物の倉庫に全部備品を管理して、この街角サロンの事業、共催の事業ということで、予算管理も、「大浜まちかどサロン」がするっていうことで、ポスターとかも貼りやすいということで、そういった中でいろんな課題がクリアできたので実際にやるっていうことで、平成 28 年 6 月 30 日にオープン記念のイベントをやって、実際に運営の方が始まったっていう形です。

【スライド p 14/15】

右下の方が、これ、木の枠の看板なのですが、これも防災ボランティアのおじ様が、木工を作るのが得意ってことで、いろんなところから木を集めてきたりして、手づくりで全部看板とか、それから一周年記念のオープンのアーチとか作ったりとか、実際に来られる時に、ちょっと時間のある時に絵合わせみたいなやつをやったらどうかっていうことで、そういったものも全部手づくりでやっています。机に置くメニューボードとかも、木の枠を使ったりして手づくりで作ってくれています。

企画とかレクリエーションもすべて、毎回、毎回このボランティア中心に、一緒に考えてもらっています。

ただこれ、一方的にならないように、参加者の方にも声を聞いて、次どんなことをやりたいとか、そういったものを確認しながら、来られる方がやっぱり楽しみに来られるような形で考えて運営の方をしています。

【スライド p 16】

これも一緒ですね。

右が、実はこれ新聞紙で座布団を作っているのですが、認知症カフェというと、なんか認知症のことが中心で、何かこう、プログラムが組まれているのじゃないかって思われていることも多いと思うのですが。

ここは始まったのが、防災ボランティアが半分ぐらいいるということで、防災グッズを作ったりとか。認知症の人とか、当事者とかご家族は、別に認知症関連のイベントにだけ参加したいわけではないですね。やっぱりいろんなことに興味を持って、いろんなことに参加したいということで、認知症カフェって言うと、そこから外れて一般のサロンと何が違うのかというふうに言われるかもしれないのですが、別に違わなくてもいいのかなって僕は思っています。一般のサロンに認知症の方とかご家族とか、また全然関係ない方が来られる。そういった部分と、一緒でもいいのかなっていうこともあって。なので認知症の内容にこだわっているものばかりを詰め合わせた認知症カフェじゃないっていう部分があります。新聞紙で座布団作って、それを頭にかぶると、いざとなると頭を守るものになりますよみたいな話をして、そうすると、認知症の当事者の高齢者とか、昔実は戦時中にねって話とか、地震があったときねって話、そこで回想法の話になったりとか、そういったことにも繋がったりしています。

【スライド p 17】

で、一応認知症の予防みたいな感じの脳トレみたいな形の、脳トレっていうとあれですね。そういったものも入れたりもしています。いろんな認知症カフェとかでよく認知症予防を中心に、プログラムが組まれているようなカフェもあるので、そうすると実際認知症になった人が、認知症予防にならないようにすることを目的としたカフェになっちゃうと、認知症になるとそこに行けなくなっちゃうのってなると、そもそもこう目指したものと違うものになっちゃうので、認知症になっても、一緒に参加ができる・ともに楽しめるって

うカフェじゃないと、予防重視にしちゃうと、認知症になった方が、はじかれてしまうようなカフェになっちゃうので、そこは注意していかなくちやいけないかなと思います。

【スライド p18】

れんげ草劇団が一周年を迎えた時、この「ケアラーズカフェれんげ草」っていうのが、一周年記念を迎えたときには、劇団っていうのを作って、今までは、講義みたいな形で少しお話をしていたのですが、お話をするとやっぱり当事者とかに伝わりにくいっていうことで、やっぱり視覚的に目で見えて楽しめるような形で劇団とかっていうのも、これはキャラバンメイトとカフェのメンバーが共同になりながら、こんな劇団を作って、実際にこんなこともあるよねみたいな形を、これも認知症っていう言葉を使わずに、だんだん歳を取ってくると、こういったこともあるよねとかっていうようなお話で、当事者がいたとしても、自分のことを認知症なんだっていうふうに、そこで不安になったりとか、落ち込んだりすることがないように少し配慮を加えながら行っております。

【スライド p19】

このカフェのメンバーなのですが、実は認知症のカフェの運営だけじゃなくて、いろんな啓発活動にも、そこから、広がりを見せています。

9月21日が世界アルツハイマーデーで、9月はずっとアルツハイマー月間っていうことがあって、実は碧南市のロビーの展示ブースに、こういった認知症の啓発活動をするっていうことで、碧南市のキャラバンメイト連絡会がブースを持たせてもらって、そこで、認知症サポーターは知っていますかとか、例えば、行方不明になった時の発見のメールのシステムの紹介だったりとか、そういったブースを持たせてもらっているのですが、その一角にこのカフェ部会の紹介っていうところで、認知症カフェやっていますよっていう紹介の場所を設けますって言ったら、もうそんなじゃ足りないっていうぐらい自分たちで展示物を持ってきてくれて、実際にこう市民ホールで掲示をしてくれたりっていうような活動もしてくれています。

【スライド p20】

こんな感じで、もう、その準備も、こういうふうにやっておいってくださいじゃなくて、本当に自分たちで物を持ってきたりとか、どういうふうにレイアウトする、飾りをするっていうのも、考えてくれながらやってくれています。

【スライド p21】

碧南市、夏の踊りのお祭りみたいな、豊田みたいな「おいでん」みたいな大きなやつじゃないのですが、「元気っす、碧南」といって、1曲をずっとリピートしたやつを踊るってやつがあるのですが、

それもこのカフェのメンバーがオレンジ色のエプロンをつけて、のぼりをつけてとか何かいろんな仮装をしながら、それも自分たちがこういう活動をしていますよとか、啓発活動の一

環として、やってくれたりしています。

【スライド p 22】

カフェ部会、もともとはサポーター養成講座を受けて、フォローアップ講座を受けてカフェ部会のメンバーとして、カフェの運営に携わってくれてただけなのですが、そこから、じゃあ自分も伝える側になりたいっていう方もいて、そこからキャラバンメイトの講習を受けていただいて、キャラバンメイトとして今、キッズサポーターですね、小学生向けに紙芝居を使って認知症のことを啓発するってというような、活動につなげていってくれた方もいます。

また、カフェのメンバーもカフェに参加してくれていた人の中から、実は私もともと認知症の親の介護してたんだよねという方が、参加者としてじゃなくて、カフェの一員として、ボランティアの一員として、今度は参加したいっていう方で、フォローアップ講座を受けてもらったりして、そのあとカフェ部会の一員として入ってもらって、ご家族が来たときに、私も同じような介護してたんですよってというような、お話し合いになったりというところで、そういった部分にも繋がったりしています。

【スライド p 23】

仲間を見つけて実現をとということで、認知症サポーター、あくまでも地域住民の一員としての活動という部分です。

なので、認知症サポーターを取ったら必ず何かをしなくちゃいけないってことでは決してないです。強制のシステムではないので、できる範囲のことで構わないってことはあります。

何かを必ずやらなくちゃいけないとなると、認知症サポーターをとる人が少なくなってしまって、結局啓発っていう目的には遠くなるので、そういったものじゃないのですが、誰かと一緒だったらできるんじゃないのか。また自分の少しの時間だけを使って、身近なことだったらできることがあるんじゃないかって考えたときに、そのぐらいだったらできるのかなっていったことは多分、探していたり、考えていたりすると、いろいろあるのかなと思ってます。

そこで1個注意していただきたいのは、「ただし、」下を書いてある、無理のしすぎっていうのは継続ができないということがあります。

カフェのメンバーも、大体 30 人ぐらい集まってもらうのですが、14 人のメンバーがいるのですが、じゃあ 14 人もメンバーがいるのかっていうと、毎回来ているのは 5、6 人なのです、メンバーは。月 2 回やっているのですが、誰かが気軽に休んでもいいように、多くのボランティアで運営しています。

今日は都合が悪いからいいよ。じゃ、私が代わりに行くよっていう形で、誰か 1 人とか 2 人とか負担がかかりすぎると、その活動がやっぱりしんどくなってしまうと、継続ができなくなる。

そうすると、その会を楽しみにしてくれていた当事者とかご家族といったところにもや

っぱり、こう障害が出てきたりするのです。そうやって無理のないように活動できる、自分のできる範囲での活動というところが、継続していくには大事になるかなっていうふうに思っています。これだけはちょっと時間の関係で、カフェの紹介の部分だけにしたのですが、小菅さんのお話の中で、例えばゴミ出しの話とかもあったかと思うのですが、地域の中で、ゴミ出しに困っている人がいたら、普通に朝ピンポンと押して今日ゴミの日だよっていうふうに教えてあげるだけでも、一つのサポーター活動だと思います。

5年ぐらい前に、私は認知症のご家族・ご本人に、アンケート調査をしたことがあるのですが、地域の人に誰でもいいから助けてもらいたいと思っているわけじゃなくて、やっぱり顔の見える・顔の知った人に助けてもらいたいというような意見が結構、多くありました。

認知症サポーターが活動に繋がらない一つの要因は、やっぱり地域の中で、誰が認知症かわかんないですよね。認知症サポーター養成講座のお話をさせていただいていても、誰が認知症かわからないから、その認知症の人の見守り・声かけっていうふうにテキストにも書いてあるのですが、でも実際に認知症じゃない人に声かけたらどうしようとか、不安になって声をかけられないとか、そこを国が求めているのですが、知らない人に声をかけるって今の世の中ではなかなか難しいですよね。

だから、それぞれの地域の中のたくさんいる認知症の当事者の方を支援するというよりも、自分のご近所、自分の身の回りの知っている顔の範囲の中で、そういった認知症の方とかがいたら、声をかけたりとか、見守ったりとか、できないことを少し支援してあげる。それも一方的じゃなくて、本人・家族がこういうこと困っていますって言ったことに合わせて支援をしてあげるってことが大事かなと思いますし、それも1人じゃ無理だったら何人かのチームを組んで、やればいかなと思っています。

この認知症カフェの部分で言えば、今は、碧南市にサポーターが中心とする認知症カフェが1ヶ所なのですが、今回、行政とコラボしたからそれってできるのだよねっていうお話は、多分あるかと思います。ボランティアだけじゃ難しい部分は当然あるかと思います。今、多くの介護事業所も認知症カフェをやったりしているのですが、大体、介護施設で人が余っているところって少ないですよね。そうするとカフェを開催したけど、そのカフェを運営する職員がいないから、継続的に続かないっていうところも、結構あります。

今日、施設の事業所の方とかいますか、一般市民の方が多いですかね。少しぐらい、いますかね。

そうすると、例えば施設の事業所は、場所とお金の管理は事業所でやるけど、例えば事業所で認知症サポーターを養成したりとか、認知症サポーターを募集したりして、サポーターを中心に、カフェを運営してもらおうとかっていうふうにすれば、行政とのコラボだけじゃなくて実は事業所のコラボだって、認知症カフェの運営というのは、スムーズにできたりということもあるので、そういったいろんなところと、自分だけじゃ難しいことは誰かと一緒に協力してやっていると、上手くいくのかなと思っています。

認知症サポーターが、活動に繋がらないもう一つの大きな要因としては、皆さん多分認知症になったことないですよね。認知症になったことある人いますか。認知症になったことに

気づいてない人も、もしかしたら。冗談です。なんで聞くかという、認知症サポーター養成講座の中で、お話があったかもしれないですけども、治る認知症ありますよね。硬膜下血種だったりとか、正常圧水頭症だったりとか、ビタミンB12欠乏症による認知症とか治る認知症もあるので、もしかしたら認知症になって、治った方もいるのかなと思ってちょっと聞いてみたんですけども。

風邪をひかれています方がいたら、マスクをしている方がいたら、多分大丈夫とか声をかけてあげられると思うのですよね。杖をついた方が立っていれば、えらいから座ったらどうって声をかけてあげられると思うのですよね。それって、足が痛い時に、自分も立っていたらしんどいとか、風邪をひいたらしんどいっていうことを共感的理解ができるんですけれど。認知症は皆さんなったことがないですよ。なったことがないので、認知症の人がどんな苦しみがあるかとか、どんな不安があるのかっていうところを、自分に置き換えて共感的な理解ができないので、そういう方に対する支援っていうのがうまくいかない部分っていうのが、大きなこのサポーターをとったりとか、認知症を理解しても、活動に繋がらないし、上手な支援につながらない一つだと思うのですけども。

認知症って別に、私達と違うことをしているわけではないですよ。ちょっと、サポーターの活動とは話が違っちゃうのですけども、認知症の人ってよく家に帰りたい、いわゆる帰宅願望って言われたりするのですけども。皆さん、今日この研修が終わったら家に帰りますか。どこかに寄られる方もいると思うのですけども、あとは誰かと待ち合わせて、ご飯食べて、家に帰ろうとした時に、じゃあ帰るねって言ったときに、帰宅願望出たねって、言われたことある人いますか、ないですよ。認知症の人は家に帰りたいって言うだけで帰宅願望って言われます。認知症の人って家に帰りたいと思ったら駄目なのですかね。おかしいですよ。

世の中って、何か他の人から見たらごみと思うものを集めている人いるじゃないですか。なんか、ガラクタみたいなものとか。でも、世間的にはコレクターといわれますよね。認知症の人が介護者から見れば、ゴミだと思えるものを集めたら収集癖と言われますよ。人権侵害ですよ。

認知症っていう症状がつくだけで、それがすべて認知症の症状によって起こっているみたいなことを言われると、それは人権侵害なのかなと思って。本人にとって大事なものだと思ってとっている。本人は家に帰りたいと思っているから帰りたいと言っている。

何ら自分達と変わらないことをやっているのに、認知症ってつくだけで、それは認知症による症状なのだ、困った行動なのだと言われてしまう。そこが自分たちと違う世界の、自分たちとは違う行動を起こしている、理解できない行動を起こしていると思うからこそ、なかなか支援に繋がらないってところがあるので、できればそうじゃなくって認知症があっても、自分たちと根本的な考えとか、不安とか、求めるものっていうのは一緒ってところを理解いただくと、スムーズな支援にも繋がるのかなと思うし、そういった中で、同じ人として困っていることがあったらお手伝いをする、できることは応援してあげる。そういったことが認知症サポーターに求められるのかなと思っております。

ちょっと質疑応答の時間を取って、これで、終わらせていただければと思います。

ご清聴ありがとうございました。

(司会)

いろいろありがとうございました。それでは質疑応答の時間に移りたいと思います。
ご質問のある方は挙手にてお知らせください。ご質問等はございませんか。

(質問者)

尾張旭市の地域包括支援センターです。よろしく申し上げます。尾張旭市でも認知症カフェの立ち上げをぼちぼちとしているのですが、なかなか、ご本人やご家族を呼び込むことができなくて、やっちはいるんだけど、周知しても結局は来ないという現状がありまして。こちらでやられているのは、結局は自分たちが楽しんでいて、そういう方が来ようと来まいと、とりあえずは活動していると、そんな感じなんですか。

(井上講師)

ご質問ありがとうございます。碧南市のカフェの方でも、最初は、認知症の方とかご家族をどう呼び込むかみたいなのがテーマにはなったのですが、そもそも、そこを無理に呼び込む必要はなくて、何かあそこへ行くと楽しいよっていう雰囲気はどんどん伝わって行って、当事者・ご家族が、あそこに行ってみようと思えるカフェをどうやって作っていかってというところに少し視点を変えていきました。

無理に、そういった当事者に合わせて、プログラムを組むというよりは、周知方法を広げて行って、あそこに行くと何か相談も聞いてくれるし、本人も楽しむことができるしといったところ、行ってみようかなと思える仕組みをどうやって作るかというところに変えていったという部分で、今、当事者の方とか家族の方も来たりとか、たまには参加者としてきた当事者がコーヒーとかお茶を配って、カフェのお手伝い役に、即席でエプロンをつけてやってみたりとか、そういったこともやったりしているので、何となくあそこに行くと役割として求められると楽しいといったことを、どうやってつくっていくのかなというふうに思います。

(了)